

第33回

宮古木曜会合唱団定期演奏会

Miyako Mokuyokai Chorus regular concert



2015年11月22日(日)

開演14:00(開場13:30)

宮古市民文化会館中ホール

入場料 300円

主催：宮古木曜会合唱団

Greeting

御挨拶

宮古木曜会合唱団 団長 川原田 隆司

皆様、本日は私どもの演奏会においでくださりまして、誠にありがとうございます。前は今年の2月でしたが、今回は11月に開催することとなりました。来年2月13日にベートーヴェン「第九」演奏会が開催されるため、スケジュールを早めた次第です。

さて、昨年10月に宮古市民文化会館が復旧し、市内の芸術文化活動も活気を帯びてきておりますが、去る7月19、20日は市内の合唱愛好家にとって特別な日となりました。辻秀幸氏ははじめとする御家族4人の先生方が来宮し、県内外から集まった合唱愛好家300人を対象に、熱のこもった講習をしてくださったのです。さらに講習参加者は先生方とともに「歌の絆 より強く！in 宮古」コンサートのステージに立ち、600人の聴衆とともに、楽しく、愉快的ひと時を過ごしました。演奏会終了後、講師の一人、なかにしあかね先生から「宮古市の皆さんが地元を見直すきっかけとなれば本望です」とのメールが届きました。「地元を見直す」という言葉が強く心に響きます。

宮古木曜会合唱団は昭和38年(1963)に結成された混声合唱団です。以来50年有余、古今東西の作品に親しんでまいりましたが、過去に歌った曲を再び取り上げてみるというのも、格別な思いがいたします。特に、作曲の高田三郎氏が自ら「永遠に歌い継がれるだろう」と語ったとされる「水のいのち」を、今回久々に歌えることは大いなる喜びです。

往年の名ヴァイオリニスト、ゴールドベルクの言葉ですが、「モナリザの微笑」は音楽を聴いている人の表情なのだからか？・・・皆様がモナリザの微笑を浮かべられますよう、団員一同楽しく歌います。どうぞごゆっくり御鑑賞ください。

Profile

プロフィール

及川 尚樹 (おいかわ なおき) 指揮

一関市出身。茨城大学大学院教育専攻科修了。佐藤篤、高橋晶、千葉和子、小野寺美葉、福原ひろみの各氏に師事。現在、宮古高等学校教諭。

佐々木 幹雄 (ささき みきお) 指揮

水沢高校、岩手大学教育学部卒業、同大学院修了。声楽、合唱指揮、宗教音楽を佐々木正利氏に、指揮を故佐藤功太郎、故中村伸一郎の各氏に師事。第3回仙台バッハアカデミー(1988年)ではH. リリング氏の指揮マスタークラスを修了。アンサンブルリストとしても国内外の著名な指揮者やオーケストラと多数共演。現在、盛岡バッハ・カンタータ・フェラインのコンサートマスター。熊友会ヴォーカル・アンサンブル及びグルッペ・ベッヒライン会員。奥州市立常盤小学校教諭。

大久保和歌子 (おおくぼ わかこ) ピアノ

山形大学教育学部特別教科(音楽)卒業。中村悦子、小野崎通男の各氏に師事。現在ピアノ教室を主宰。

Program

プログラム

第1部 美しきメロディー、歌う悦び

指揮 佐々木 幹雄 オルガン 大久保和歌子

Tanzen und springen 《踊れ、跳べ》

作曲：ハンス・レオ・ハスラー

Now, oh now I needs must part 《今こそ別れ》

作曲：ジョン・ダウランド

Panis angelicus 《天使のパン》

作曲：セザール・フランク

Linden Lea 《リンデの草原》

作曲：ヴォーン・ウィリアムズ

第2部 心にしみる日本の歌

指揮 及川 尚樹 ピアノ 大久保和歌子

蹄鉄屋の歌

作詞：小熊 秀雄 作曲：林 光

こころようたえ

作詞：一倉 宏 作曲：信長 貴富

群青

作詞：福島県南相馬市立小高中学校平成24年度卒業生

(構成小田 美樹)

作曲：小田 美樹 編曲：信長 貴富

～ 休 憩 ～

第3部 混声合唱組曲「水のいのち」

指揮 及川 尚樹 ピアノ 大久保和歌子

混声合唱組曲「水のいのち」

作詞：高野喜久雄 作曲：高田 三郎

雨

水たまり

川

海

海よ

Program Note

歌詞 対訳 解説

Tanzen und springen

Tanzen und springen,
singen und klingen,
fa la la la, fa la la la, fa la.

Lauten und Geigen
solln auch nicht schweigen,
zu musizieren und jubilieren steht
mir all mein Sinn.
Fa la la la, fa la la la, fa la.

Schöne Jungfrauen
in grüner Auen,
fa la la la, fa la la la, fa la.

Mit ihn' n spazieren und konversieren,
Freundlich zu scherzen,
Freut mich im Herzen
für Silber und Gold.
Fa la la la, fa la la la, fa la.

踊れ、跳べ

踊れ、跳べ、
歌え、楽器を鳴らせ、
ファ、ラ、ラ、ラ、

リュートもバイオリンも
沈黙は無用。
わたしは全身全霊で、音楽に浸り、
喜びの声をあげる。
ファ、ラ、ラ、ラ、

うるわしき乙女らが、
緑あふれる野に、
ファ、ラ、ラ、ラ、

彼女らとそぞろ歩き、語り合い、
親しく戯れ合えば、
それは金銀のごとく、
わたしを歓喜に酔わせる。
ファ、ラ、ラ、ラ、

解説：ハスラーは 1562 年頃、ドイツに生まれました。ドイツは音楽の後進地でしたが、彼はイタリアに留学し、その成果を持ち帰り、作曲家、オルガン奏者として活躍しました。パッハ（1685 年生れ）は音楽の父と称されますが、その立派なご先祖様ですね。

曲は 1601 年出版、ドイツ語の 5 部合唱。無伴奏とされていますが、当時は様々な楽器と一緒に演奏するのが普通でした。「ガイヤルド」という当時流行した陽気で活発な 3 拍子の舞曲です。（ちなみに当時流行した緩やかで重々しい舞曲に「パヴァーヌ」があります。）作詩者は不明ですが、「ダンス、音楽、そしてきれいなお嬢さん、サイコーッ！」という他愛ない内容です。（ヨハン・シュトラウスのワルツに「酒、女、歌」というのがありましたね。）

この曲はハスラーより 30 年程前、フランドル地方（今のベルギーあたり）に生まれたブリュゲルの絵を想起させます。彼は繰り返し農民たちの宴を題材にしました。そこに描かれているのは、酔っ払い、ビール、バグパイプ、そしてダンスに興じる人々です。400 年前の人々がそこで生き生きと躍動しているのです。（花館）

Now, oh now I needs must part

Now, oh now I needs must part,
Parting though I absent mourn.
Absence can no joy impart;
Joy once fled cannot return.
While I live I needs must love,
Love lies not where hope is gone.
Now at last despair doth prove
Love divided loveth none.
Sad despair doth drive me hence;
This despair unkindness sends.
If that parting be offence,
It is she which then offends.

今こそ別れ

さあ どうしてもお別れ
嘆いてはみても別れゆく
姿が見えなければ 喜びはありえない
消えた喜びは 決して戻らない
生きている限り 私はどうしても恋をし
希望のないところに愛はない
望みも絶えた 今になって
別離は愛を絶やすと知った
悲しい絶望は 私をここから追いたてる
無情が与える この絶望が。
もしも別れが 罪ならば
せめられるべきは彼女

解説：ダウランドは 1563 年頃、英国に生まれました。ヨーロッパ各地、そして英国で王侯貴族に仕え、作曲家、リュート（当時はやったギターの親戚みたいな楽器。マンドリンに似ています。）奏者、歌手として活躍しました。つまりシンガー・ソングライターですね。宗教音楽も作りましたが、その本領はリュート音楽、そして愛や悲しみを歌った声楽曲にありました。彼の音楽はヨーロッパ中で、そして上流階級のみならず一般市民にも大流行し、また最高のリュート奏者ともてはやされました。また当時の演劇にはふんだんに音楽が使われていましたが、彼の音楽も芝居を大いに盛り上げていた事でしょう。ちなみにシェイクスピアは彼と同世代、1564 年生れです。（二人に面識があったかどうかは残念ながらわかりません。）

曲は 1597 年出版、英語の独唱あるいは 4 部合唱で、リュートその他様々の楽器と組み合わせて演奏されました。作詩者は不明ですが、あるいはダウランド自身かもしれませんが、失恋の歌で、恋人を責めますが、この曲は彼が英国王室に仕える夢がかなえられずにいた時期に作られました。「彼女」を「英国王室」に読み換える事もできるかもしれませんが。彼は長年、大いなる名声と、かなわぬ夢のはざままで生きました。念願の英国王室付きとなったのは 49 歳の年でしたが、それ以後彼はほとんど作曲をしなかったとの事です。（花館）

Panis angelicus

Panis angelicus fit panis hominum;
 Dat panis coelicus figuris terminum:
 O res mirabilis!
 Manducat Dominum
 pauper, pauper, servus et humilis.
 pauper, pauper, servus et humilis.
 Panis angelicus fit panis hominum;
 Dat panis coelicus figuris terminum:
 O res mirabilis!
 Manducat Dominum
 pauper, pauper, servus et humilis.

天使のパン

天使のパンは 人々のパンとなったのです
 その天のパンは 予兆をすべて終わらせました
 おお、驚くべきこと！
 主を食べるのが
 貧しき 貧しき 慎ましきしもべたちであるのは
 貧しき 貧しき 慎ましきしもべたちであるのは
 天使のパンは 人々のパンとなったのです
 その天のパンは 予兆をすべて終わらせました
 おお、驚くべきこと！
 主を食べるのが
 貧しき 貧しき 慎ましきしもべたちであるのは

解説:セザール・フランク(1823-1890)はベルギー出身で、フランスで活躍した作曲家、オルガニストです。サン・サーンスやフォーレとともに国民音楽協会の設立に加わり、1872年パリ音楽院の教授に迎えられました。「天使のパン」は、1872年フランクが50歳の時の作品「荘厳ミサ曲」の1曲ですが、その美しい旋律から、コンサートなどで単独曲として演奏されることが多くあります。カトリックのミサの中の聖体拝領の部に歌われます。キリストの聖体になぞらえたパンを食べる儀式の時の歌で、宗教的な静けさと純粋な美しさにあふれています。(富樫)

Linden Lea

Within the woodlands, flow'ry gladed,
 By the oak tree' mossy moot,
 The shining grass blades, timber shaded,
 Now do quiver under foot;
 And birds do whistle overhead,
 And water's bubbling in its bed;
 And there for me, the apple tree
 Do lean down low in Linden Lea.

When leaves, that lately were aspringing,
 Now do fade within the copse,
 And painted birds do hush their singing,
 Up upon the timber tops;
 And brown leav'd fruit's aturning red,
 In cloudless sunshine overhead;
 With fruit for me the apple tree
 Do lean down low in Linden Lea.

Let other folk make money faster,
 In the air of darkroom'd towns;
 I don't dread a peevish master,
 Tho' no man may heed my frowns.
 I be free to go abroad,
 or take again my homeward road,
 To where, for me, the apple tree
 Do lean down low in Linden Lea.

リンデン リー

森の中、花咲く広場
 カシの木の間を抜けた切株のそば
 きらめく草の葉と、木の影が
 今は足元で揺れてるんだ
 鳥たちは頭の上でさえずってるし
 川の流りは水底で泡立っている
 そしてあそこには私のために リンゴの木が
 低く枝を垂れているんだ このリンデの草原に

ついこの間芽吹いたはずの木の葉も
 今やこの林の中で色あせ
 色鮮やかな鳥たちも歌うのをやめてしまった
 あの木の上では
 そして茶色の葉の下のこの果実は赤く色付く
 雲ひとつない日の光の下で
 私のためのこの果実でリンゴの木は
 低く枝を垂れているんだ このリンデの草原に

世の中のやつらには金儲けさせておけばいいさ
 薄汚れた都会の空の下で
 私は気難しい親方も怖くはないし
 私のしかめっ面を気にする人もいないだろう
 異国に行くのも構わないだろうし
 また故郷へ帰る道を選んだっていい
 そこには 私のためにリンゴの木が
 低く枝を垂れているんだ このリンデの草原に

解説:イギリス民謡に造詣の深かったヴォーン・ウィリアムズ(1872-1958)30歳前後の作品と言われています。原曲は歌曲として知られておりますが、数々の合唱編曲によっても親しまれています。詩のウィリアム・バーンズ(1801-1886)はイングランド南西部の故郷ドーセット地方をこよなく愛していました。美しい田園風景が広がる故郷リンデン・リー、そこではたわわに実ったりんごの木が低く枝を垂れている……。懐かしい故郷の秋に、主人公は遠く離れた都会から思いを寄せています。

イギリス民謡は、日本人の琴線に触れる曲が多いですね。明治時代からイギリス民謡は数多く輸入されました。「植生の宿」「螢の光」「アニー・ローリー」「故郷の空」「庭の千草」「ロンドンデリーの歌」「グリーンズリーヴズ」・・・思い出しただけで心が安らぎます。(川原田)

蹄鉄屋の歌

泣くな、
 驚ろくな、
 わが馬よ。
 私は蹄鉄屋。
 私はお前の蹄から
 生々しい煙をたてる、
 私の仕事は残酷だろうか。
 若い馬よ。
 少年よ、
 私はお前の爪に
 真赤にやけた鉄の靴をはかせよう。
 そしてわたしは働き歌をうたいながら、
 ——辛棒しておくれ、
 すぐにその鉄は冷えて
 お前の足のものになるだろう、
 お前の爪の鎧になるだろう、

お前はもうどんな茨の上でも
 石ころ路でも
 どんどん駆け廻れるだろうと——、
 私はお前を慰めながら、
 トッテンカンと蹄鉄うち。
 ああ、わが馬よ、
 友達よ、
 私の歌をよっく耳傾けてきてくれ。
 私の歌はぞんざいだろう、
 私の歌は甘くないだろう、
 お前の苦痛に答えるために、
 私の歌は
 苦しみの歌だ。
 焼けた蹄鉄を
 お前の生きた爪に

当てがった瞬間の煙のようにも、
 私の歌は
 灰色に立ちあがる歌だ。
 強くなってくれよ、
 私の友よ、
 青年よ、
 私の赤い炎を
 君の四つ足は受取れ、
 そして君は、けわしい岩山を
 その強い足をもって砕いてのぼれ、
 トッテンカンの蹄鉄うち、
 うたれるもの、うつもの、
 お前と私とは兄弟だ、
 共に同じ現実の苦しみにある。

解説：1959年、林光（1931-2012）28歳の時に作曲されました。昭和50年頃までは、混声合唱曲としてよく歌われていた曲です。実は私（川原田）、今回この曲の音源を探しているうちに、曲の誕生に関わった印牧（かねまき）真一郎さんという方と知り合いになりました。印牧さんが東京芸大在学中に、小熊秀雄の詩に心酔し、何とかこの詩を合唱曲として世に広めたいとの思いに駆られ、林光さんに作曲をお願いしたのだそうです。

小熊秀雄（1901-1940）は北海道出身の詩人、作家、画家。

血を分けた兄弟親子のように愛おしい「わが馬」に、「非情」にも煙が立ち上がるほどの熱い蹄鉄を打ち込む「蹄鉄屋」。この詩には、真の友情というのは、甘っちょろいものではないんだよ、というメッセージが込められている、と印牧さんはおっしゃっています。（川原田）

こころようたえ

心よ

だから心よ せめて歌え

あなたの複雑 あなたの空虚

あなたの震え あなたの繰り返しを

あまりに散文的な日々も あんまりなエピソードも

あたりまえのように 消えてしまうけど

ギターもハーモニカもなくとも

引っ掻き傷のようなその声でいいから

ぼくは思いっきり哀しく思いっきり切なく

そして思いっきり肯定的な歌を聴きたい

だから心よ あなたは歌え

いのち尽きるまで 歌え

解説：2011年2月に作曲されたこの作品。一倉宏の詩集『ことばになりたい』から採られた歌詞で、原詩は11連からなる長大な作品ですが、その中の最終連を使用しています。「だから心よ せめて歌え」このことばに全てが凝縮されていると思います。たとえこころが壊れていたり、空っぽになってしまったりしても、こころは脈動し、常に何かを訴え続けなくてはならない。そんな強いエネルギーがこの曲には詰まっています。冒頭は圧縮されたエネルギー。その後そのエネルギーは多くの気持ちを包括して解放され、大きいうねりとなって提示部を完成させます。展開部はテノール、アルトとメロディーが移り変わりながら少々穏やかに音楽は進み、再現部が近づくにつれて音楽の膨張が見られます。再現部は少々ゆっくりなテンポで今まで以上に堂々と登場し、提示部以上のエネルギーを持ちます。ソプラノの高音でのオブリガートは音楽により切迫感を与え、緊張感と感動を生みます。ラストはひとつひとつのことばが伝わるようホモフォニックに展開され、希望の光を見るような明るい和音で華々しく幕を閉じます。（及川）

群青

ああ あの町で生まれて

君と出会い

たくさんの思い抱いて

一緒に時間を過ごしたね

今 旅立つ日

見える景色は違っても

遠い場所で 君も同じ空

きっと見上げてるはず

「またね」と手を振るけど

明日も会えるのかな

遠ざかる君の笑顔 今でも忘れない

あの日見た夕陽 あの日見た花火

いつでも君がいたね

あたりまえが 幸せと知った

自転車をこいで 君と行った海

鮮やかな記憶が

目を閉じれば 群青に染まる

響け この歌声

響け 遠くまでも

あの空の彼方へも

大切な すべてに届け

涙のあとにも 見上げた夜空に

希望が光ってるよ

僕らを待つ 群青の町で

きっと また会おう

あの町で会おう

僕らの約束は

消えはしない 群青の絆

また 会おう 群青の町で・・・

解説：東日本大震災で被災した東北地方の人たちが合唱できる環境を支援しようと、「Harmony for Japan」が京都の文化会館に南相馬市の小高（おだか）中学校合唱部を招待したのは平成25年3月のこと。このとき同合唱部がアンコールで歌った曲が「群青」でした。被災後の思いをこめて生徒たちが詩を作り、担当の音楽教師が作曲した当曲がホールに響き渡ったとき、会場が熱い涙と感動で満たされたと、同じく招待されていた宮古木曜会の団員から聞きました。その後「群青」は、本山秀毅先生の御尽力のもと、当代きっての合唱作曲家、信長貴富氏の編曲によってスケール面でも色彩面でもさらに豊かな合唱曲として世に広まることとなりました。被災した生徒たちの悲しみ、一緒に支えあおうとする心の絆が、飾らない言葉、切々としたメロディーから伝わってきます。（川原田）

あれから2年の日が

僕らの中を過ぎて

3月の風に吹かれ 君を今でも思う

水のいのち

1 雨

降りしきれ 雨よ
降りしきれ
すべて
立ちすくむものの上に
また
横たわるものの上に

降りしきれ 雨よ
降りしきれ
すべて
許しあうものの上に
また
許しあえぬものの上に

降りしきれ 雨よ
わけへだてなく
潤れた井戸
踏まれた芝生
こと切れた梢
なお ふみ耐える根に

降りしきれ
そして 立ちかえらせよ
井戸を井戸に
庭を庭に
木立を木立に
土を土に

おお すべてを
そのものに
そのもののてに

2 水たまり

わだちの くぼみ
そこの ここの
くぼみにたまる
水たまり
流れるすべも めあてもなくて
ただ
だまって
たまるほかはない

どこにでもある 水たまり
やがて
消え失せてゆく
水たまり
わたしたちに肖ている
水たまり

わたしたちの深さ
それは泥の深さ
わたしたちの言葉
それは泥の言葉
泥のちぎり
泥のうなずき
泥のまどい

だが
わたしたちにも
いのちはないか
空に向う
いのちはないか
あの水たまりの にごった水が
空を うつそうとする
ささやかな
けれどもいちぢずないのちはないのか

うつした空の
青さのように
澄もう と苦しむ
小さなころ
うつした空の
高さのままに
在ろう と苦しむ
小さなころ

3 川

何故 さかのぼれないか
何故 低い方へゆくほかはないか

よどむ淵 くるめく渦のいらだち
まこと 川は山にこがれ
きりたつ峰にこがれるいのち
空の高みにこがれるいのち

山にこがれて 石をみごもり
空にこがれて 魚をみごもり
さからう石は 山の形
さかのぼる魚は 空を耐える

だが やはり 下へ下へと
ゆくほかはない 川の流れ

おお 川は何か
川は何かと問うことを止めよ
わたしたちもまた
同じ石を 同じ魚を みごもるもの
川のこがれを こがれ生きるもの

4 海

空をうつそうとして
波一つなく 風ぐこともある
岩と混じれなくて
ひねもす
たけり狂うこともある

しかし
凡ての川はみな
そなたをさして常に流れた
底に沈むべきものは沈め
空にかえすべきものは
空にかえした

人でさえ 行けなくなれば
そなたを さしてゆく
そなたの中の一人の母をさしてゆく

そして そなたは
時経てから 充足足りた死を
そっと岸辺にうち上げる
みなさい
これを 見なさい と云いたげに

5 海よ

ありとある 芥
よごれ 疲れはてた水
受け容れて
すべて 受け容れて
つねに あたらしくよみがえる
海の 不可思議

休まない 汀
波の指 白い指 くりかえし
うまず くりかえし
億の砂 億の小石を
数えつづける
海の 不可思議

くらげは 海の月
ひとでは 海の星

海螢 海の馬 空にこがれ
あこや貝は 光を抱いている

そして 深く暗い海の底では
下から上へ
まこと 下から上へ
雪は
白い雪は 降りしきる

おお 海よ
たえまない 始まりよ
あふれるに みえて
あふれる ことはなく
終るかに みえて
終ることもなく
億年の むかしも いまも
そなたは
いつも 始まりだ
おお 空へ
空の高みへの 始まりなのだ

のぼれ のぼりゆけ
そなた 水のこがれ
そなた 水のいのちよ

たとえ 己の重さに
逆いきれず
雲となり
また ふたたび降るとしても

のぼれ のぼりゆけ
みえない つばさ
いぢずな つばさ あるかぎり
のぼれ のぼりゆけ
おお

解説：音楽評論家、指揮者として活躍中の宇野功芳氏が「日本の合唱団でこの曲を手がけたことがない団体はまずあるまい。」とエッセーに書いたのが凡そ40年前。残念ながら今の高校、大学の合唱団で演奏会に取り上げられることは少なくなりましたが、「いまだかつて、音楽において大自然の輪廻が、かくまですばらしく捉えられた例は決してあるまい」と同氏が語ったほどの日本の誇る名曲です。氏の解説を続けましょう。

「第一曲の〈雨〉は万物にしとしと降りそそぐ雨を静かに表現し、第二曲の〈水たまり〉はスケルツォ風のリズム的な音楽に変る。そして第三曲の〈川〉では渦巻く激流が歌われるが、その旋律は《水のいのち》全曲中で最も美しいものの一つである。第四曲の〈海〉は、すべてを受け容れる海の描写となり、終曲の〈海よ〉では、水のいのちが再び空に上っていき、雨となり、川となって輪廻を繰返すことが暗示される。(中略)しかし、《水のいのち》が感動的なのは、単に窮まりの無い自然を歌っているからではない。詩人、高野喜久雄と、作曲家、高田三郎がこの曲に託したのは、他ならぬ、われわれ人間の姿なのである。」水たまりのような儂い、ちっぽけな存在の私たち。下へ下へと流されるほかはない川のように、時や運命に逆らう事の出来ない私たち人間は、それでも気高くあろうと「空」や「山」に、こがれる心を持つ存在でもあります。

そして大いなる、母なる海へと辿り着いた水たちは空へ上っていく……

のぼれ のぼれ のぼりゆけ そなた 水のこがれ そなた 水のいのちよ

宇野氏はエッセーを次のように結んでいます。「まこと、見えない翼に乗ってのぼっていく魂は、水のいのちであると共に、人のいのちでもあるのだ。」(川原田)

Member

団員紹介

【ソプラノ】

大久保秀子 大久保和歌子 太田屋早紀 北村 葉月 坂下みゆき 田澤 紗綾
富樫 亮子 芳賀志津子 平塚 捷子 山崎佐和子 山崎 尚子 吉田 真弥子
※大西 和子

【アルト】

青山 倫子 大石 敦子 大坂 久子 君成田明希 小林 弘江 斉藤 絹子
高岩 厚子 中村登志江 武藤 歩子 福島 史子 古舘 陽子

【テノール】

及川 尚樹 川原田隆司 高玉 智晴 田澤 佑亮 ※佐々木幹雄 ※千葉 行有

【バス】

内村 義博 木村 茂男 花舘 充章 武藤 秀郷 ※大坂 文人 ※東海林隆幹
※は団友

団員募集

宮古木曜会合唱団では、団員を募集しています。合唱が好きな方、年齢、経験問わず歓迎いたします。お気軽に見学にお出でください。

♪練習日時♪ 毎週木曜日 19:00～21:00

♪練習場所♪ 山口公民館

♪お問い合わせ♪ 0193-71-2250 (川原田) 0193-87-3099 (富樫)

